

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 伊吹泰郎

挿絵 SAIPACo.

プロローグ

第一章 いきなり大勝負！

第二章 空の上の告白

第三章 希 対 伊織

第四章 本当の想い

第五章 信頼は一日にしてならず

エピローグ

登場人物紹介

Characters



あまぎ いおり

天樹伊織

圭のクラスメイトだが、実は異世界から修行に來た魔法少女見習い。勝気で活発な性格で圭に好意を持っているものの、希に遠慮してなかなか踏み出せない。

しらとり のぞみ

白鳥 希

伊織の従妹でもある魔法少女見習い。控えめで少々おっとりした天然系ながら、いざという時は圭も驚く行動力を見せる。圭に好意を寄せており、伊織によくからかわれている。

やまなしともか

月見里朋華

高飛車で気の強さも併せ持つ謎の少女。実は何かの目的を持っており、そのために時に非情な手段を使うこともある。

みなみだ か な

南田佳奈

朋華とともに圭達の前に現れた魔法少女。

アール

朋華の使い魔。見た目は子猫だが、人間の言葉を理解する。

さえぐさけい

三枝圭

少々口は悪いながら、根はお人よしの少年。同じクラスに転校してきた伊織と希と仲良くなる。

どうやら彼女は、もっと和やかな愛の営みを想像していたらしい。

「ああつ！ ああつ！ それでいいんだつ……いっぱい感じてくれつ……希つ！」

圭は頷きながら、尚も愛液が滴り落ちるような激しさで指を使つた。

指に絡む蜜と柔肉のヌメリで、彼女に挿入した瞬間のイメージは、どんどん鮮烈になってくる。しかし、それゆえに歯痒さも膨らむ。どれだけ想像しようと、生の悦楽にはかなうはずもない。

「希つ……俺つ……もう我慢できない……！ 希の中に……俺をつ……俺のを！」

筋肉が振れそうなほどの力で、無理に腕をストッパさせて呼びかける。と、希も息を切らしながら首をガクガク縦に振つた。

「う、うん！ うんつ！ わ、私からお願ひしたことつ、だ……もんつ！ 圭君の……好きなことをしてほしいの……っ！」

だが、そこで情欲の中に詫びるような声色も混じる。

「あの……もしかしたら……もつと変な声出しちゃうかもしれないけ……どつ……」

「だから、それが普通なんだつて……。男にとつて、そういう声を出してもらえるのは、嬉しいことなんだよ……っ」

圭は逸る気持ちを抑えてもう一度教えると、希から手を離し、身を起こした。一步引き、そそり立つ逸物の根元を右手で掴んで、希の股間を覗きこむ。

（うわっ……）

開拓されたばかりのそこは、愛液に塗れ、ヒクヒクとわなないていた。陰唇は左右へ開き、肉壁は充血し。未だに性への戸惑いを残す心とは逆に、大好きな少年を早く早くと手招きしているようだ。それでいて、秘所全体はやはり小さく、どれだけ淫らになっても、漠然とした幼さが残る。自分が清らかな少女にいけない快感を刻み込んだのだと、圭は改めて実感させられた。

「行くからな……っ」

希へだけでなく、自分へも聞かせるように言い切る。

そのまま腰を進めれば、ズブ……ブッ！

上を仰ぐペニスの切っ先は、ごく自然に秘唇の入り口へめり込んだ。亀頭の上へ広がるのは、火傷しそうな熱いうねりだ。

（こんなところへ……潜っていくのか……っ）

目の前で火花が弾け、膝もカクツと碎けそうになった。

「うう……くおっ！」

呻きながらも踏ん張り、腰を抜かすのは耐える。だが、ここからどう動けばいいのか。下手に動いても、ペニスは割れ目へ入れず上滑りするだけになりそうだ。

（う……ま、まず……はっ……！）

迷う間も、ペニスへは秘裂が密着している。狂おしい痺れを注ぎ込んできている。ここでこずっついていては、挿入に成功しても、あっという間に達してしまう。

「あ……そう……だ……」

圭はまたも希へかぶさった。空いていた左手を彼女の股間へ回りこませ、指でクレヴァスを掻き分ける。それは一刻も早く奥への道を見つけないがためにした行為であったが、「や、やああうっ!? 広がっちゃっ……あああつ……!」

大事な場所をこじ開けられた恥じらいからか、刺激に驚いたからか、希はビクンと腰の位置をずらしてしまう。

「のぞっ……待っ……ああおっ!」

後を追って身体を前へ倒した圭は——ヌプッ!

不意に亀頭を熱い荒波に包まれた。咄嗟の動きで、思いがけず鈴口まわりを膣へ潜り込ませることに成功したのだ。勢いが乗っているから、ただでさえきつかった痺れは、一瞬で何倍にも膨れ上がった。

「うぐううあああつ!」

脆い粘膜を濡れ褰の脈動に嬲られて生じる衝撃は怖いほど。頭は容易についていけず、身体だけが半ば勝手に動き続けてしまう。

貪欲に進んだペニスは、ゴムのような抵抗にぶつかって、ようやく止まった。

（希の……処女膜……っ!）

その言葉と触感が圭に活を入れる。後もう少しで、自分は彼女の処女を奪うことになるのだ。

「んくうつ……ああつ……うああつ……は、入ってき……うあああつ……!!」

希も背中を仰け反らせ、口をパクパクさせていた。——と、

「ひっ!!」

彼女は急に一際強く全身を強張らせた。よほど驚いたらしく、圭を飲み込みつつある秘唇までが、手加減なしに収縮する。

「うううぐつ……!!」

剛直へ不意打ちをされて、圭は全身が総毛立った。それでも何事かと彼女と同じ方向へ視線をやりかけ——、

「いいいつ!!」

今度こそ本当に頭が真っ白になった。行為へ没頭するうちに、ゴンドラは乗降口まで戻ってきていたのだ。まだ術の効果は残っているらしく、誰も圭達には気付いていないが、それでも全員が観覧車そのものは見えている。

結果として圭と希のまぐわいに注がれるも同然の、何人分もの目、目、目。

圭は雷に打たれたようなショックに下半身が硬くなり——結果、ズブズブズブウツ!

「ひいいあはあああああつ!! けつ……君ううううあああつ!!」

希を切れ切れに喘がせる乱暴さで、処女膜を打ち抜いてしまった。さらにブレーキもままならない。希の中は想像より遥かに狭く、しかも肉襞で無数の壁ができているのに、ペニスはそれをどんどん掻き分けていく。

「のぞつ……おおううつ!!」

膺壁へ先頭切つてぶつかるのは、感度抜群の鈴口や張り出したカリ首だ。おかげで希の大事な場所を貫きつつ、圭もすさまじい反撃にさらされ続けて、気が変になりそうだった。しかも、肉襷はただ粘膜を擦るだけではない。亀頭に通過された部分は、波打つように陰茎を抜き上げてくる。こじ開けられるまでは肉棒を押し戻そうとしていたくせに、入ってきた後は一転、離すまいといったげに徹底的に食い締めるのだ。

「希っ……希いいっ!」

ペニスを半分近く沈めたところで、ようやく圭は動きを止めることができた。もはや希に対する愛情のみが、狂おしい愉悅の中で自分を保つ唯一の拠り所。呻き混じりに名を呼べば、

「あっ……あああっ! け、圭くうんっ……!」

彼女も後ろへ首を捻じ曲げ、うわごとのように呼び返してくる。

「私いい……こんなっ……お、大勢の人がいるところ……でっ……見られっ……てるみたっ……あううんっ!」

極限の恥ずかしさと破瓜の痛みの両方に苛まれて、泣きじゃくるような声だ。

「わ、悪いっ……俺っ……俺はっ……!」

圭が今になってうろたえると、希はハッとしたように、虚ろだった目へ小さな光を取り戻した。

「あつ……やつ……ううん……！ あつ……謝りつこは……さつきで……もう……おしま
いだからっ……ね……？」

涙を滲ませ、口元をわななかせながらも、微かに慈しむような笑みを見せてくれる。ど
こまでも真摯な彼女に、圭は胸がいっぱいになった。

「希……！」

「あつ……圭君……っ」

圭は吸い寄せられるように、自分の唇で希の唇を塞いだ。これがファーストキスだとい
う感慨などない、激情のままのキス。残っていた精液の苦味が絡んでくるのを無視して、
思うままに希の唇を吸い、ヌルヌルした舌をねぶり回した。

（キスって気持ちいい……っ！）

ペニスほどの感度はないものの、舌は自在に操ることができる。欲望のままに躍らせ、
悩ましいところを相手に押し付けることができる。

「あ……くうんっ……ちゅぱっ……あ……ふっ……！」

希も口内の摩擦は気持ちいいらしい。飼い主に甘える子犬のような鳴き声を洩らしなが
ら、接吻に応えてくる。二人はしばし唾液を捏ねくりあい、ようやく圭が顔を離れた時、
ゴンドラはまたも四分の一ほど上昇していた。

「ふはっ……あ、あのね……圭君……」

秘所を貫かれたまま、希が上気した表情で言いよどむ。

「どうした……?」

圭ができるだけ穏やかな口調で促すと、彼女は悩ましげに目を逸らした。

「私……やつぱり変みたい……っ……初めては痛い……っ……聞いてたのに……あの……恥ずかしさで頭がいっぱいのうちに……痛いのがなくなつてきちゃったの……それでね……」

「ああ……っ」

圭は最後まで聞かず、希の膣内に残っていた距離をズズッと埋めた。

「ひあああ……!!? ま、また奥にいいひっ!!」

途中であられもないよがり声に変わる希の呼びかけ。

(俺も……俺も気持ちいいっ!)

パニックを乗り越えようと、粘膜同士の接触と膣壁の圧迫は一段と甘美になった。直後、肉棒の先端が希の最深部へぶつかり、悦楽に何ともいえない充足感も加わる。

「希……分かるか……っ? 最後まで……入ったぞ……!」

「あはっ……ああんっ……分かる……よおお……っ、圭君が……来た……あああ……!」
希も嬌声で答えてくれる。つい聞きほれそうになる圭だったが、ここが気張りどころだ。彼は尻の筋肉を引き締め、歯も食いしばると、ゆっくり後退を開始した。

ジュブ……グチュチュユッ……!

新たに淫猥な蠢動へさらされたカリ首は、慎重に動くだけでも、猛烈に疼いてしまう。

またしても璧の一枚一枚をこじ開けることになるため、膣内から出られないまま、蕩けてしまいそうである。

下がるにつれて根元から先端へと流れる悦楽は、まるで道連れに精液を汲み上げるかのようだ。だが、圭は止まらなかった。今度は身体が勝手に反応してのことではない。彼自身が快楽を求め、希を徹底的によがらせたくなっているのだ。目を落とせば、陰茎には赤い処女血だけでなく、大量の愛液も絡んでいた。

そして、望み通り、

「やつ……ぱりっ……いひあああつ！ け、圭君が動くつつ、気持ちよくなっちゃうっ……よおおおつ！ ああああんっ！ 私いいひっ……飛んじやつてるっ……みたいひ！」
少女は夢見心地に瞳を彷徨わせている。どうやら、圭のために嘘を吐いているわけではない、本当に快楽が痛みを上回ってきたらしい。

「ああっ！ どんどんっ……行くからなっ！」

今度は勢いを上乗せして突入。

「あああつ……大きいっ！ ひっ……あひいいいんっ！」

ズブンツと貫通された希の喉から迸るのは、またも悦びの喘ぎだった。

（思い切り動いても……大丈夫みたい……だ！）

油を注がれたように、圭の心で炎が燃え上がる。

後は息も吐かずに、力いっぱい引き抜き、子宮口まで打ち抜き、その連続だった。官能

の衝撃は、行きと戻りで次々に形態を変えながら大きくなり、どこまで行っても果てがない。だが、天井知らずなのは、圭の欲望でもある。

グチュツ！ ズチュツ！ ブチュツ！

彼が繰り出すピストン運動は、希から愛液を飛び散らせ、下の水溜まりも、腰と腰のぶつかる音も、一層大きくしていった。

そこへ魔法少女も可憐な喘ぎをかぶせる。

「圭君っ、圭くうんっ！ 圭くうううんっ！ 好きいいいい！……大好きいいいい！ ああああひっ！ いひいいあああああつ！」

いつしか、希は自分から薄い尻を前後に振り出していた。時に捻りを交える彼女の動きは、思いがけない方向に肉竿を曲げる。汗で濡らした背中も、熱心に圭の胸へ押し付けてくる。どうやら生まれて初めての強すぎる法悦で、理性や自制が失せてしまったらしい。

もはや、圭と希は二人だけの世界に入り込んでいた。ただひたすら快楽を貪り、共に高みへ登り詰めていく。足場がグラグラ揺れるのも気にならない。たとえ、ゴンドラが落下しそうになっても、希の術が切れて外から見られてしまうことになったとしても、もはや中断はできそうにない。

「はああっ……はあああつ！ おっ……ぐくうううっ！」

汗だくになった圭の股間の底では、精液がグツグツと沸騰するように外へ出るきつかけを窺っていた。僅かでも力を抜けば、すぐさま噴火じみた勢いで尿道を遡ってきそうだ。

（くっ……まだイキたくない！ もつともつと希の中にいたい！）

時間を稼ごうと精一杯尿道を絞る圭。しかし、絶頂を前にしたペニスへは、一擦りごとに容赦なく快楽が送り込まれる。どうにもならない切迫感に胸を締め付けられるが、それさえもどこか被虐的な快楽の源となった。もはや、手や足の先に至るまで、浅ましいムズ痒さが満ちている。

（も、もう駄目だ……っ）

覚悟しかけたその時、耳に希の訴えが滑り込んできた。

「け、けえっ……くうんっ！ 私っ……何かっ……あああっ……何かきそおっ……だよ
おおっ……！ た、助け……てええっ！ 気持ち良いのがっ……あああっ……大きすぎち
やう……のおおおっ！」

（……もしかしてっ！）

崖っぷちにいた圭は、一抹の願望を籠めて尋ねる。

「希もっ……イキそう……なのか……っ!!」

下手に喉を震わせると、一緒に尿道が広がってしまいそう。そんな中から搾り出された質問に、希は短い髪を振り乱して叫んだ。

「わからっ……ないよおおっ……！ こんな初めてでっ……ひやあああんっ！ これ
がイクってっ……ことなの……おっ!! あっ……ひきっ、あはあああうっ！」

（希も……イキそうなんだ……!）

少年の願望は確信に変わった。

「希っ……一緒にイこう……っ！ 俺達っ……一緒に、にいいいいっ！」

彼の呼びかけが、希の混乱も霧散させたらしい。彼女は一瞬、身震いした後、壊れた玩具のように繰り返し頷き出す。

「うんっ……うんっ……圭君とならっ……怖くないっ……怖くないよおっ！ イッてええっ！ 圭君もっ……あああっ……私の中でっ……さ、さっきみたいにつ……せえええき出してえええええっ！」

「っ……！」

はしたないおねだりに、圭は脳天を打ち据えられた。ギリギリのところまで踏みとどまっていた下半身が脱力しそうになった彼は、考えるより早く、結合部近くに残していた左手を走らせる。ぶつける先は肉棒を咥え込んだ淫裂の上——にあるはずのクリトリスだ。

カリッ……！！

手触りも何も確かめる余裕がないまま、尖っているともしき小さな点を指先で引つ掻いた。その途端、

「いひぎいいいっ!!」

希は悲鳴さえ上げられないほどに喉も背筋も反り返らせ、己に突き立つペニスをあらぬ方へと捻り上げた。膣壁も縮み、亀頭も竿も無差別に搾る。

「ぐううううっ!!」



希は手の下の微かな反応から、性感帯を的確に見抜いているらしい。金縛りにかかっていたも同然だった伊織の肢体は、徐々に艶っぽくくねり出した。

「やめて……てばあっ……あんっ！ も、もう悪ふざけは……終わりにっ……！」

「悪ふざけじゃないよ……っ。私……伊織ちゃんにも感じてほしいから……っ。それに……伊織ちゃんの胸、とっても柔らかくて……私も気持ちよくなっちゃいそうなの……」
 言って、ピンクの乳頭をついばむ希。

「ひあああうっ！」

今度こそ、伊織は感じているとしか思えない声を上げる。一瞬、背筋も床から浮き上がった。動きは股間にまで伝わり、ギチギチとペニスを捻り上げてくる。

（くっ！ これって思ってた以上だ……っ）

伊織が悶えるほどに、圭の愉悦も大きくなった。動きを抑えるのが、ひどくもどかしくなってしまう。

（もう見ているだけじゃ我慢できねえっ！）

少年は希が愛撫していない右乳房を左手で鷺掴みにした。

（おっ……！）

真っ先に感じたのは、指が深く沈み込む肌の柔らかさだった。それでいて、軽やかな弾力も返ってくる。その複雑さは、パイズリで感じた時と一味違う。確かに希の言う通り、思う存分弄り回し、とことん追求したくなるものだった。

伊織の反応も一段と大きくなる。

「そんなあああつ……圭までえつ……いっ……一度にいいいひっ！」

もはや二人の目を気にすることすらできないらしい。

「まだまだあるからなっ！」

調子付いた圭が次に持ち上げたのは右手だった。こちらは結合部へ伸ばし、処女血が絡む秘裂の上で、尖るクリトリスを摘み上げる。

「いひゃあああつ!! そ、そこやだつ……やっ……うやはあああああつ!!」

小さく硬いしこりは、まるで少女の欲望を支配するスイッチであった。きつい膣がさらに狭まり、壁の全てが妖艶に波打つ。

「うぐっ！」

圭が身震いする間も、

「そんなにつ……そんなにされたらおかしくなっちゃうっ！ お願いだから聞いてえええっ！ あたひいいいっ……止まらなくなっちゃうってばあああつ！」

次々と種類を増やす刺激に、伊織は飲み込まれつつあった。

（うっ、うしっ……行けるっ！）

女陰の変化に発情し、少女のなす術もない姿にサディスティックなものも覚えながら、少年は両手を思いつくままに操り出す。加えて、控えていたピストン運動も、チャンスとばかりに試みる。

手始めに、腰全体での字を描きながら、ゆっくり後ろへ。押し寄せてくる淫肉へ、やり返すように己をグイグイ押し付けてみれば、

「うくぎいっ！」

凶悪な愉悅に、自然と奇声が洩れてしまった。

だが、弱い場所を上下左右関係なしに抉られた伊織のよがり声はさらに大きい。

「あひいあああああつ！　う、動いちややあああああつ！」

バストの上の手や顔を押し返さんばかりにもがき出す。そこに痛々しさはほとんど残っていない。色っぽさの方がずつと大きい。

（このまま慣らしていけば……伊織もっ……！）

頭をメチャクチャにかき乱された少年でも、男女の交わりに関することだけは辛うじて考えることができた。リズムを失うまいと、彼は熱く潤んだ蜜壺へ、間髪入れずに男根を突っ込む。今度はさらに力を乗せて。

ズブズブズブウウッ！

「はくあああああつ!?　ううう動かないでつてばあああんつ！　希もやめてえええつ！」

子宮口まで一気に貫かれた伊織から放たれる切羽詰った喚き声。しかし、そんな反応は、主を暴走させるだけだ。

「俺はやめないっ！　このまま続けるからなっ！」

断言と共に、彼は巨乳へ指をめり込ませ、陰核をつねり、本格的な律動も開始した。

ジュプブウッ！ チュブウッ！ ジュポツジュポツ！ グプチュブウウッ！
一突き毎に荒々しくなる往復で、愛液とカウパー氏腺液のブレンド汁が、破瓜の血を洗い流さんばかりにかき出される。淫臭や水音も室内の隅々まで広がっていく。

「ひあああつ！ やつ……あああつ！ あたしいいひつ！ あたつ……しつ……ふああああんっ！」

はしたない声も、止めようとする伊織本人の意思を無視して、垂れ流されていた。このまま感覚が増していったら、二度と生意気な性格に戻れなくなりそうながりようだ。

一方、責める側である少年も、過激な悦楽にさらされていた。こなれてきた魔法少女の秘所は、卑猥にのたくりながら、硬いペニスを揉みくちやにしてくる。

（けどっ……もつと……俺はもつと欲しいんだっ！）

彼は嵐の中を漕ぎ進むつもりで、さらに腰を使い続けた。時折混じる円を描く動きなど、正にオイルを扱うような逞しさだ。しかし、力を籠めて動くと、荒れ狂う愉悅を一瞬は支配できるものの、すぐに反動に襲われ、転覆しそうになる。

「はあっ！ はあっ！ はあっ！」

上限のない喜びに吞まれかけて喉を反らした圭は、ふと右隣に目を留めた。そちらでは、巨乳へ奉仕する希のコスチューム姿が、不規則に揺れている。上半身を前へ倒しつつ、掲げた腰をくねらせる彼女のポーズは、普段の恥ずかしがり屋な性格からは考えられないハレンチさだった。

(三人で……だもんなっ！)

圭は誘われるように上体を捻り、右手を伊織の陰核から希へと移動させた。抱きかかえるように華奢なお尻へ腕を回りこませ、ヒラヒラした裾をたくし上げる。

「圭……くうんっ？」

戸惑ったように顔を上げる希。だが、圭と目が合った途端、彼女には包容力のある笑みが浮かぶ。

「圭君……私にもしてくれるん……だね……」

「ああっ、いいかっ？」

「うんっ……もちろんだよっ……っ。嬉しい……な……あんっ！」

途切れ途切れの会話はそこで終わり。

圭は薄いヒップの丸みへ手を張り付かせ、蒸れそうなほど汗で湿った縞パンを二度三度と撫でた。半ば死角に入って見にくい分、感触は余さず楽しみたい。それから、股間の辺りの布地を横へずらし、指先を直に秘所へ押し付ける。待っていたのは、媚肉の柔らかさ。上昇した体温。愛液のヌルつき。圭が弄る前から、女陰は発情を露にしていたのだ。

「ひうううっ！ あっ……来てくれた……ああうっ！」

感じやすい場所を少年に圧されて、希はつんのめるように伊織へ体重をかける。彼女の十本の指はことごとく曲げられ、捕まえた豊満な乳房をますます責め撚った。

「あっうあっ！ そんなに搾らないでえええっ！ 胸えっ、破裂しちゃうからあああっ！」

「う、うんっ……！ でもっ……圭君が触ってくれてるんだもんっ……指に力っ……入っちゃうよお……っ！」

エスカレートする希と伊織のレス行為に、圭も勇躍。開きかけた陰唇の合わせ目へ、並べた人差し指と中指を押し込んだ。途端に迸る希の嬌声。

「んひやあああうっ！ け、圭君ううああっ！ いおっ……りちやあああんっ！ 私いいっ……どんどんエッチにっ……いいいいひっ！ あっ……あああはああむっ！」

わななく白い魔法少女は、昂りのやり場を求めるように、巨乳へ顔を押し当て直した。愛くるしい唇を吸盤さながらに使って、乳頭周囲へがむしやらにキスマークを付ける。

「あっ……あああううくっ！ 圭いっ！ あたひっ……か、感じすぎちゃうのおおっ！ ひぐっ……うあひいいいっ！ 希もおっ……お、お願いだからああっ！ 吸いすぎちゃらああああっ！」

舌の呂律が回らなくなってきた伊織に懇願されても、希は止まらない。むしろ、従姉がもがけばもがくほど、条件反射のように手や口の力を強める。出るはずのない母乳まで引きずり出しかねないほどの、のめりこみ具合だった。

しかし、ふしだらな痴態をさらす彼女の膺は幼いまま。濡れた膺壁を狭め、指二本でさえ、容量オーバーのようにきつく搾りたててくる。

（俺……さっきは本当にここへ入ったのか……?!）

太い男根を挿入されて、裂けてしまわなかったのが信じられない。もつとも、圭の驚愕

は長く保たなかった。

(つか、こつて……指でも気持ちいいっ！)

濡れた淫肉に揉み解されると、快楽以外を感じられなくなる。少女達の秘所や蜜には、牡の身体をどこもかしこも性感帯に作り変える力があるかのようなうた。

「おっ……おとおっ！」

少年は腰遣いと同じリズムで、指の出し入れも始める。別に意図して動きを合わせたわけではなく、単に複雑なことができないだけ。しかし、不器用ながらもひたむきな愛撫は、希にとつて嬉しいものだっらしい。

「んぐっ……うぐうむっ！ ひふうううあああつ！」

彼女は伊織を愛撫しつつ、犬が尻尾を振るように腰も上下左右へ躍らせる。喋れない分、身体中で快感を表現する様は、淫らで尚且つ可愛らしい。

ジクググチュッ！ ジュポツヂュポツ！ ズブブググプッ！

数を二倍に増やしたはしたない水音。だが、それ以外は全て、倍などという生易しいものではなくなっていた。

「んひいいいふっ！ いおりひやああううふっ！ け、けえくううんっ！ ふたりともっ……だいすっ……きいいいっ！」

「け、圭っ……これええっ……どこまで熱くううっううああああつ！ し、死んじやうっ！ あたしいいっ……ひんじやうううううっ！」

希は大切な相手と共に快楽を味わえる幸せに浸り、逆に伊織は淫らの深みへ堕ちていく。対照的にも見える乱れ方の彼女らだが、どちらも法悦が理性の範囲から大きくはみ出しているのは同じだ。

「俺もっ……俺もだ……ああおっ！ 伊織いつ！ 希いいいつ！」

圭も愉悦が強まる一方。限界を超えたと思つた次の瞬間には、さらに強烈な刺激で、指もペニスも脳天も締め付けられる。

しかし、至福のまぐわいにも終わりは忍び寄ってきた。最初の気配は、ペニスの奥に芽生えた極度の緊張感だった。神経の一本一本が逆立つようなそれは、さつきも体験したばかり。それにつられて尿道の奥には精液もにじり寄ってくる。だが、追い詰められた気分がまた、欲望を増幅する。

「出っ……出るううっ！ もうっ……出ちまいそうだっ……あああっ！」

ピストンを続行しながら圭が喚くと、伊織の女芯は生唾を飲むようにドクンと脈打った。「だ……あああんっ……駄目よおおっ……駄目ええええっ！ 中に出すなんてえええあっ！ あっ……赤ちゃんできちゃううううふっ！ あっ……あたひいいいつ……けえに妊娠させられちゃううううっ！」

だが、言葉と逆に、身体は膣内発射を拒んでいなかった。尚もはしたなく肉棒を舐めしやぶる。

希もスイッチが切り替わったように、尻の振れ幅を大きくしていた。そのせいで息が続

かなくなったらしく、「ぶはっ」と口から乳首を吐き出してしまふ。しかし、それを補うように両手の動きは過激化の一途。美乳を中ほどで搾って、瓢箪ひょうたんのように歪ませる。

「圭っ、くううんうっ……！ わ……た……ああんっ！ 私もっ……私もおおっ！ 圭君と一緒にイキたいよおおおっ！ ねえっ、いつ……伊織ちゃんもっ、イツてえええへえええっ！」

「許してええっ！ 許して許して許してえええああんっ！ ふ、二人がかりなんてえええっ！ やあああああつ！ イカされちゃううううっ！」

巨乳を右に左に弄ばれながら、淫猥極まりない腰のダンスを継続する伊織。

「伊織っ……お前、本気で嫌がつてないだろ！」

「そ、そんなことおおああつ……！ せええき駄目ええええええっ！」

いくら口先だけで頼まれても、圭は肉棒を抜く気になれなかった。伊織と希へ何度も己を突き入れる。

ジュボズボツ！ グヂュルツ！ チュプグチュグチュツ！

「イクぞっ！ このままっ……イクっ……からなっ！ つおああああつ！」

愛液を飛び散らせる暴れ馬のような抽送は、圭にとつてもとどめとなった。すでに広がりかけていた尿道が、鈴口が、勢いを得た精液に押し開かれる。

「イクうううあああああつ！」

圭は絶叫しながら、腰を突き出した。指を歪に曲げた。そのせいで鈴口は子宮口と衝突



彼女は自分がソファから転落しそうだと本能的に察したらしく、腕と背中を伸ばした。圭の頭にしがみ付き直し、むせび泣きながら髪へ頬ずりしてくる。

(よしっ……!)

圭は心の中で快哉を上げた。指戯を維持したまま、目線を前へ戻す。

伊織も乱れ続けていた。いや、さらにヒートアップしていた。

速まる一方の動きは、朋華の指や舌を秘唇の奥へ巻き込みかねないほどだし、ポニーテールも跳ね回って、何もない空間を狂ったように叩いている。どうやら、従妹の悲鳴でさらに発情させられてしまったようだ。

「やだっ……やっやっ……やらあああああつ! これ以上やってたらああんっ……あたし……いいいいひっ……戻れなくなっちゃうあああああつ!」

よがり声が垂れ流しなのだから、涎まみれの口も開きっぱなしだろう。きつと瞳は感極まったようにきつく閉ざされ——圭はそれらを見られない分を補いたくて、乳房へ籠める力を強めた。柔らかい手触りを確かめながら、端正な形を奪うように揉み解す。押し上げられた乳首も欲望のままつねり上げる。

「ふぎっ……いいいいっ!! 引っ張ら……ないれえええっ! あたしの胸えええっ……いつ……苛めないでえええっ!」

だが、そう懇願する間も、少女の腰の振れ幅は大きくなっていた。圭に掴まれていない右乳房も、プルンプルンとポニーテールに負けない派手なダンスを踊っているに違いない。

「つううっ！ 伊織っ……いいっ！」

不意に蕩けた膺壁と男根とが強くぶつかり合い、圭は天井を仰いだ。同時に希のことも強く挟つてしまい、

「ふきあああああっ!? なっ……ああうんあああああああああっ!?」

彼女に一際高い悲鳴を上げさせる。急激な悦楽で白い魔法少女は浅い絶頂を迎えたらしく、感電したように幼膺を収縮させていた。だが、圭は指を止められない。休憩を挟むには、股間の愉悅が大きすぎる。

「い、伊織いいいっ！」

「圭いっ……圭いいひっ……きあうあああっ！ 奥にいひっ……来っ、ひはああああおっ！ ゴリゴリ来てるうううっ！ 来ちやううううっ！ もう許してええええっ！」

（伊織って……やっぱりマゾみたいだ！）

以前の疑惑が鮮明に蘇り、圭はちよつとした意地悪を思いつく。

「朋華っ……教えてくれっ！ 伊織のアソコっ、どうなってるっ!?」

「あ……それは……っ」

声をかけられた令嬢は、面食らったようだったが、すぐに答えてくれた。

「けっ、圭さんのおチンポが入って……裂けてしまいそうに広がっています……う……でもっ……とても気持ちよさそう……ですわ……あっ……っ！」

「サンキュ……っ……朋華っ……!! 希もっ……聞こえたかつ!!」

圭が顔を抱かれたまま、目だけを右隣へやると、希は絶頂が止まらないらしくた。まともに喋れないまま、返事代わりに腕と膺の力を強めてくる。

「はうんううあああつ! はひいいうううううっ! い……いおっ……ちやつ……あつ、きうはあああんっ!!」

このふしだらな会話を伊織に聞かせることこそ、圭の狙いだった。

「いっ……ひいっ……そっ、そんな言いふらしちゃっ……ひやめええええへっ!」

果たして、羞恥を煽られたのを境に、伊織の膺圧は一段と強まる。助けを求めてしがみ付くようでもあるが、密着の度合いを増せば、性の衝撃が強まるだけだ。

「うああああっ……当たっちゃうううううっ!!」

「伊織っ……恥ずかしい方が感じるんだなっ!! ほんと……マゾだよなっ!」

圭は自分でも言葉責めを始める。だが、続く展開は彼の期待を超えていた。

「違うのっ! ち……がつ……違うつてばあああああうっ!」

「つぐううっ……うおおああっ!!」

少女は首だけでなく、腰を左右にくねらせ始めたのだ。のたくる蜜壺に肉棒が捻られ、表皮も裏筋もとことん伸ばされる。

直後に秘裂は急上昇。竿は一瞬だけ軽くなるものの、すぐにまたズズンッ! 火照った肉壁にねぶり抜かれる。

「うっ……くうああああっ!? いおっ……りっ……動きすぎだ……ああおっ!」

もっとかうかうつもりでいたのに、圭の方が追い詰められてしまった。

せめて、五本の指で転がされる玉袋のこそばゆさだけでも緩めば、そう思ったが、発情で理性を曇らせた朋華に、少年の切迫感は伝わらない。

「は……ちゅむっ!」

令嬢はまたも性器へむしやぶりつき、

「じゅずずっ……圭さんも天樹さんもっ……とても濡れていて……ゴクンッ……ぷは……あっ! い、いくら飲んでもっ……追いつきませんのっ……! ああ……わたくしっ……

天樹さんが羨ましいです……うう……っ!」

愛液を嚥下しながら、合間合間に卑猥な描写を交え続ける。

(これ以上してたら……出っ……るううっ!)

調子付いた結果の墓穴だった。

一方、逸物と直結する伊織には、ペニスが発射の準備段階に入ったと分かったらしい。

「言わないでっ……えええあああっ! 圭が聞いてるううっ! おちんちん大きくなってるのおおおっ! またっ……あああうっ! 中に出されちゃううううっ!」

しかし、嫌がるような口ぶりと逆に、彼女も止まらなかった。それどころか、愛する少年の射精を間近に感じ、オルガスムスへの階段を駆け上り始めている。

(た、耐えられねえっ!?)

これでは伊織より先にイッてしまう。

精液をねだる強烈な抱擁に、額や背中へもますます脂汗が浮いてきた。

逃げ場を求めて意識を横へずらせば、

「あっ……あっ……ひいいいあああっ！　けえっ……くううあああうんっ！」

希はイキっぱなしのままだった。華奢な身を痙攣させては再び喘ぎ、秘部を縮こまらせてはまた脈打たせ、を繰り返す姿は、官能の海で溺れて浮き沈みしているかのよう。

（希っ……こんな……いやらしく喘いでっ……！）

身も心も委ねてくれる少女の姿に、圭はますます絶頂へと加速させられた。しかし、奮起もさせられていた。

（伊織だつて後ちよつとなんだ……っ！）

彼は唇を噛み締め、ついに自分から律動を始める。手始めに狭い膣内で剛直を振り回すように、ソファアへ沈んだ尻をグイッと浮き上がらせた。魔力が戻ってきたためか、過剰に力が湧いてくるようだ。

ヌプププッ！　ニュプッ！　グプッグプッ！　ジュプバツ！

腰を波打たせ出すと、亀頭と淫褻の衝突は、媚粘膜を蒸発させんばかりの過激さとなる。しかし、焦りならもう消えていた。圭は秘洞を欲求のままに突き上げ、亀頭粘膜や薄皮をすり抜けてきた愉悦を残らず飲み干す。

「イこう……ぜっ！　伊織もっ……俺とっ、希と一緒にっ……いいっ！」

「やつやあああうつやつやはあああつ！ あたひいいつ……イツちやうううううつ！
イツ……イクツ……イクイクウうううつ！ イクふううううううつ！」

誘われ、今にも達しそうに喉を反らせる伊織。

圭は右手も罨へかかったケダモノのように暴れさせていた。

G スポットを中心に周囲の壁も責め立て、今までアクセント程度に弄っていた陰核は、
執拗に親指で弾く。弾く。弾く。

「わたつ……いつ……バ……バラバラッ……バラバラに……いつ……うあいひつ!! く
ひつ……は……ぐつ……はひいいつ!! ふうぐつ……！ おつ……！ はあおつ！」

絶頂の一点に足止めされた希は、呼吸すら難しそうだ。

さらに正面では、やつと朋華も圭のエクスタシーが間近なのだ気付いた。

「圭さん……い……イクん……ですのね……つ……！ 天樹さんの中へ……出してしま

うんですのね……！ お……おチンポっ……とても硬くなっていますわ……ああんっ！」

令嬢は息を弾ませ、陰茎の付け根へ舌を、睾丸へ指を絡ませてくる。卑猥ながらも愛情
たっぷりの奉仕は、指の下で息づく精液に噴出のための元氣を与えてくれるかのようなうだ。

「ああっ……イキそうなんだっ！ おっ……俺もっ……イクウうううつ！」

これが極めつけ——一際強く伊織へ腰を打ちつけ、希の弱点も擦り上げた。

ジュブブウウウウッ！ ズブズブブブウウウッ！

指とペニスで生まれた愉悦は、稲妻のように少年の背筋を駆け登り、頭の髄まで問答無

用に焼き尽くす。

魔法少女達もしなやかな肢体を大きく仰け反らせていた。

「うつ……きつ……あつ……はぐ……つ！　うつ……くつ……うあああつ……んひあああああああはああうううやあああああつ！」

「イクウウウ……イグイグううあああああつ……けえのおちんちんでええつ……あつ……くつ……ふひいいあああああああはおおおおとおおとおつ！」

しばし硬直した末、喉を震わせ始める希。特大のオルガスムスは、延々と続いた絶頂の波をも押し流したらしく、堰き止められていた喘ぎが洪水のように溢れてくる。

伊織も腰を落として震えながら、歯止めを失ったようにペニスを強く締め上げてきた。

「うおおおおつ!!」

気絶しそうな法悦に包まれて、圭も忍耐の限界だ。怒張が勢いよく弾けるのを感じ取る。ビュブウウツ！　ドプツ！　ビュプツ！　バビュプツ！　ビュクビュクビュクウツ！　男根は伊織の胎内へスペルマを撒き散らしながら、ジャンプしながらの勢いで二度三度と脈打った。その新たな摩擦に、

「ふおおぐつ!!」

圭は素っ頓狂な声を上げ、

「は……入ってくつううああんつ！　熱いのビュクビュク来てりゅううううつ！」
伊織も絶頂が収まらないうちから、浅ましい二度目の昇天を果たしてしまう。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!
ちよびりマツな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

白装の騎士
ピルグリムメイデンII

「小説…狩野景／挿絵…ぼち」

全国書店で
好評
発売中



吸血姫と狩獵者三人の影が闇を斬る
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画
が待望のノベライズ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜

「小説…夜士郎／原作挿絵…渡瀬行人」

全国書店で
好評
発売中



**セクシー退魔師が荒ぶる神様がエッチな
ご奉仕で鎮める伝奇アクション!**

カースイーター!
呪詛喰らい師
「小説…蒼井村正／挿絵…或土せねか」

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

●仙留学園戦姫ノブナガ! ①～③
●思春期なアダム ①～②
●約瀚(帝)都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

●借金お嬢クリス ①～②
●プリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫

●無敵の姫騎士がSMに目覚めたようです
●ピルグリムメイデン 深紅の道札聖女

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリー



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!